

種がとれたら

種ができるようになると、「家に持ち帰りたいな」「来年の1年生にも少しあげようかな」「種をくれた〇〇さんにお礼をしたいな」という思いが出てきます。

しかし、あさがおとの関わりはこれで終わりではありません。子どもの思いを大事にしながらも、その前に、遊んだり命のもとについて考えたりします。

ここが
ポイント

種でも遊べる！

『あさがおで遊ぼう（P31）』でも遊びの紹介をしましたが、種でも遊ぶことができます。乾燥した種は丈夫でそのままでも遊べる優れものです。作品も作れます。低学年の子どもの発達に即した多様な活動を楽しめるようにしたいものです。

あるある NG!

学校ではよく、種ができ始めると子どもたちが各々種をとり、びんや袋にためていく光景が見られます。この時期ついつい種とりを子どもたちに任せきりになります。しかし、ため方を間違えると大切な種にカビが生えてしまいます。しっかり乾燥させたり、風通しのよいネット状の袋にしまったりするなど、ひと工夫が必要です。

ここが
ポイント

植えた時の種と比べる！

春に書いた種の観察カードをもとに、「植えたのと同じ種ができたこと」「できた種を植えればまた花が咲くこと」から命のつながりを、「春には5個しか植えていないのに、そこからたくさんの種ができたこと」から命の広がりを感じさせていきます。

◇ 種遊びアラカルト ◇

《 おもちゃ 》

マラカス → 紙コップ二つをつなぎ合わせた中に、種を入れます。

お手玉 → 布ぶくろの中に、種を入れます。

どちらも種の音を楽しみます。



《 絵 》

画用紙に種を貼って、足りない所はクレヨンで描きます。あさがおの種は動物や人間の目にもなります。

《 飾り 》

紙粘土と組み合わせます。紙粘土でペンダントの丸い部分を作り、そこに種を埋めたりひもを通したりします。乾燥してからニスを塗って仕上げます。



「種がたくさんとれたよ。」

気付き！

子どもたちは、春に5個の種を鉢に植えています。そこで、先生の方で、今回取れた種の数を5で割ってあげると種1個から何個の種ができたかが分かります。種5個で考えるよりも種1個から考えた方がより命のもとが感じられます。結果を一人一人に教えてあげ、子どもの活動を価値づけてあげると、命をつなげたり広げたりした立役者は、お世話を続けた自分だという自分のすごさにも気付いていきます。（自分への気付き）